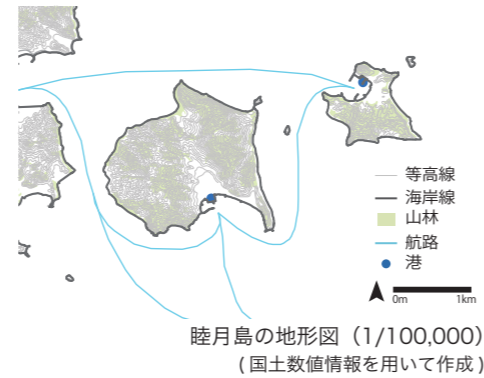


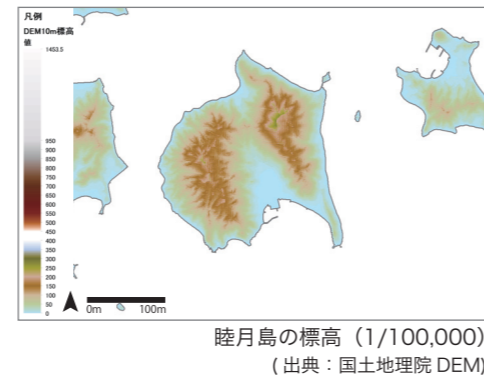
4.4 睦野（睦月島・野忽那島）



睦月島

(1) 空間構成

睦月島は、島内に二つの大きな山があり、その間の谷地に西ノ川が流れ、河口付近の扇状地に集落が形成されている。集落は、海岸沿いの道とそれに直行する海から背後の山に向かって伸びる道を構造として、古くは東西二つの集落のまとまりがみられた。睦月島は行商により繁栄したとされ、集落内の建物は、その多くは増改築されているものの、立派な長屋門形式の家屋が数多く残されている。集落背後の低地および傾斜地は農地として開墾され、東西二つの山を八の字に回るスカイラインと呼ばれる農道が整備されている。この農道は、西の幟立山には約9kmの島四国八十八ヶ所、東の高松山には約7kmの西国三十三ヶ寺の二つのルートとしても意味づけられている。



睦月島の状況 (2015年現在)	
面積	3.81km ²
外周距離	13.2km
人口	222人
世帯数	142戸

出典：「平成27年国勢調査」、「日本の島へ行くHP」



(2) 開拓と行商の歴史

1) 忽那氏による開拓

島には、縄文時代・弥生時代の土器片が発見されており、古くから人が住んでいたとされている。本格的な開拓は、11~12世紀、忽那氏一族により行われ、南北朝時代には、北条を拠点とする河野氏と忽那氏の争いで島が戦場になったという。当時の睦月島は、農業生産の豊かな大浦や漁業収入のある津和地等に比べ、人口が多い割に小規模で、生活の支えとなるものがあまりなかった。ところが江戸末期から明治にかけて、睦月島の人々の生活は行商という生業を見出してから大きく変わる事となる。

2) 行商の始まり

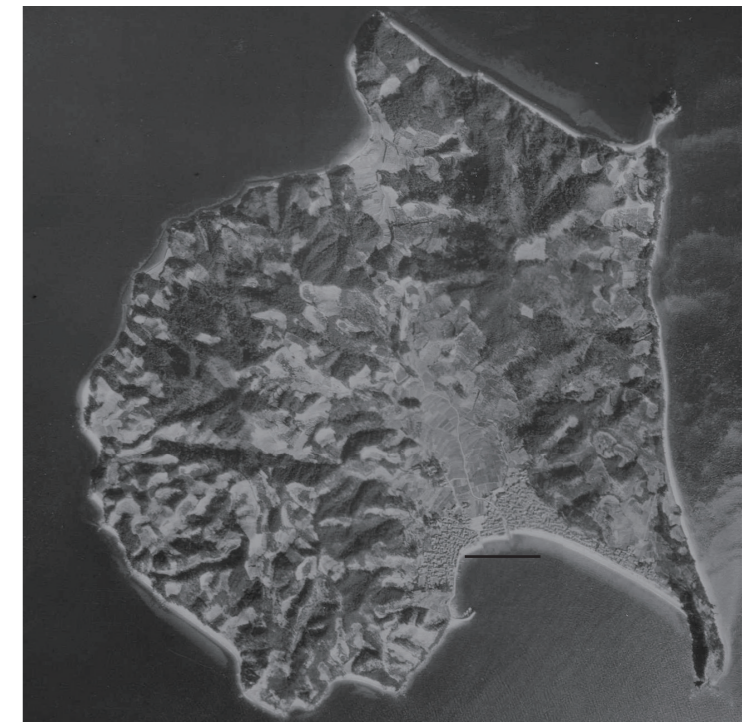
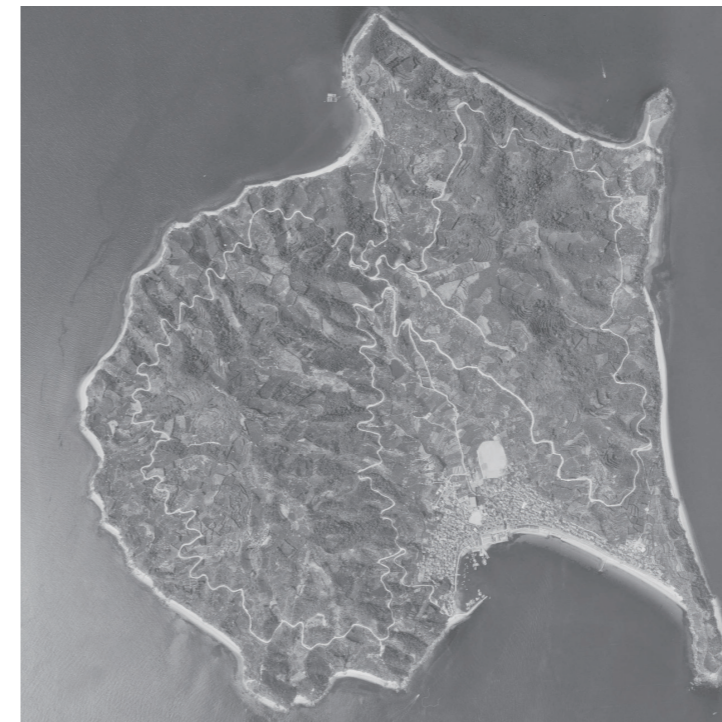
江戸時代は、参勤交代を行う帆船に対する潮待ち・風待ちの避難場として利用されており、その一行に対して品物売る「沖売り」が増えたことが行商の始まりである。江戸時代の末期から明治時代にかけて、伊予絣(いよがすり)を中心とした手織り反物製造が隆盛した。自島で製造した反物を、

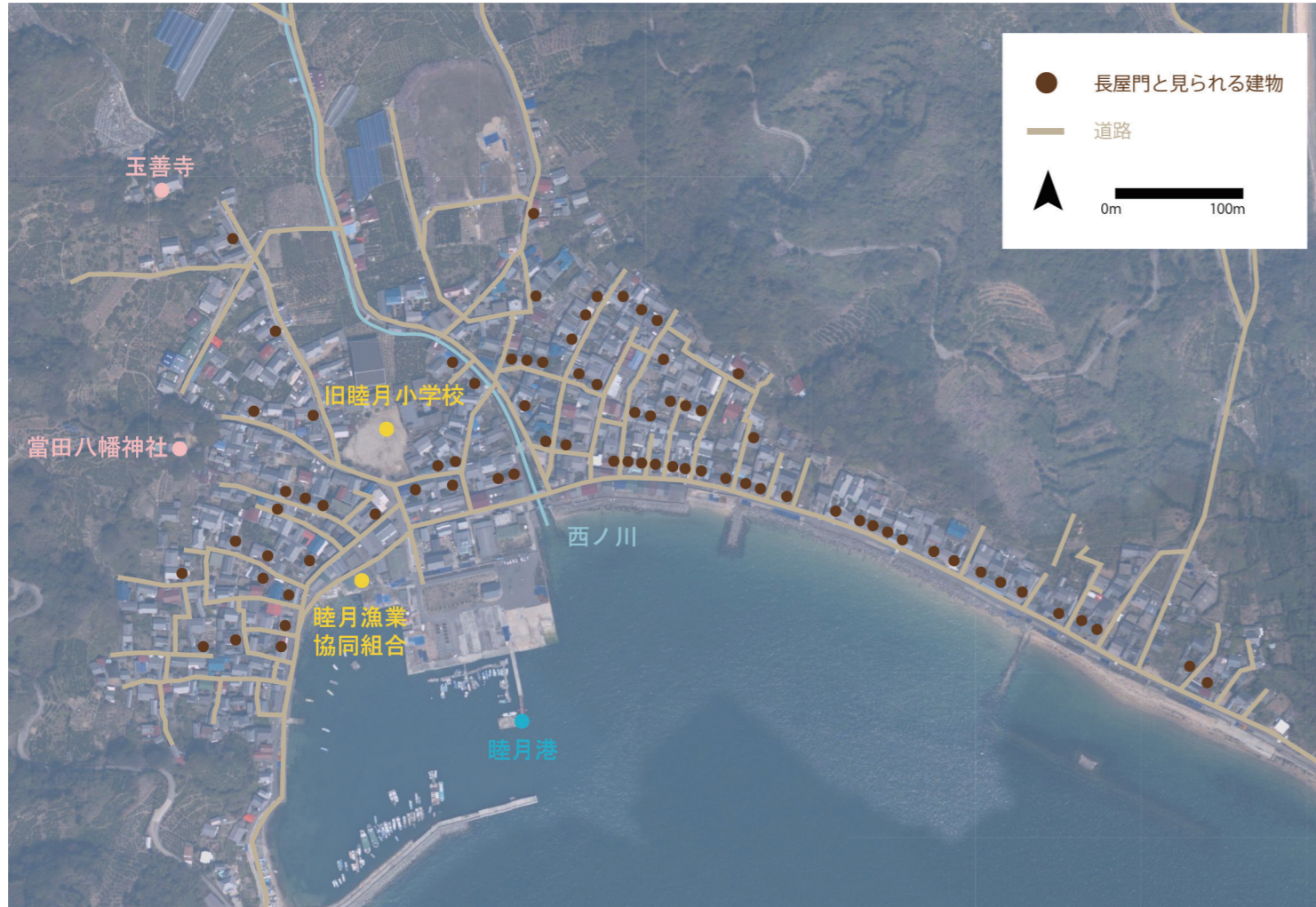
各自の船により行商で販売することで、仕入れの費用も流通経費もいらず、高利潤を得ることができた。また瀬戸内海中央部に位置することから、他地域への交通は非常に有利な立場にあった。この手織り反物製造の発達は、愛媛県全体に見られたものであるが、狭小で農業生産力の低い睦月・野忽那島にとって、手織り反物の製造は貴重な現金収入であったため、多くの島民が従事した。

3) 行商の発展

江戸時代末期に始まった潮待ちする船舶に対する「沖売り」は、明治20年を境に伝馬船で瀬戸内海各地の海岸や島嶼を周り行商を行うよう「縞売り」として発展した。これは、二ダロ染め(おはぐろのふしで染めた黒の織物)を含めた手織り反物が、縞模様であることからその名で知られるようになった。船団の規模も拡大し、数名で船を宿とし、一度の行商で1ヶ月程度周ったと言われる。明治30年代からは、さらに規模が拡大し、ある程度の帆船により「縞売り船」と称した船で寝泊りし、瀬戸内海

にとどまらず九州・山陰各地に進出することとなる。「縞売り」は昭和初期まで続くこととなるが、全盛期には売り子を含めて約500人が行商にでており、当時の睦月島の人口の約3分の1にあたる。





睦月集落の構造

(国土地理院地図空中写真 2004年(1/5,200)をベースにその他情報を追加)

(3) 睦月島の集落

1) 睦月集落の立地と空間構成

島南部に位置する睦月集落は、東西 2 つの山の谷地から流れる河川の河口付近にまとまって形成されている。集落の中心部には港や漁協、旧小学校等の公共施設が立地する。古くはこれらを境に集落が二手にわかれていたように見受けられる(前頁空中写真)。集落東側は、背後にすぐ山が迫っていて、海岸沿いに細長く伸びた宅地が特徴的である。集落の北側には、2 つの山に挟まれた少しなだらかな傾斜の地形があり、みかんをはじめとした畑地が広がっている。



集落東部や海岸沿いに並ぶ長屋門 (2020.9 撮影)



集落中心の睦月小学校跡地 (2020.9 撮影)

2) 主要道路と各住戸へのアクセス

集落の主要な道は、海岸沿いの道と、それと直行するように形成された河川河口付近から集落背後の農地、山へとつながる道の 2 つである。各住戸へのアクセスの多くは、海岸沿いの道から分岐した背後の山に向けて作られている。したがって、宅地の接道の傾向としては、海岸沿いは南側で、集落内陸部は東西面が多くなっている。



集落と山に向けて形成された路地 (2020.9 撮影)



住宅群と背後の山 (2020.9 撮影)

(4) 睦月島の建築

睦月島の集落には、長屋門が多く残されている。明治から昭和に建設されたと考えられるこれらの長屋門は、その立地や建築年、その後の増改築などによって多様な形態を持っている。睦月島の長屋門のパターンは、立地による配置パターンと、階層と屋根等によって大まかに分類することができる。また、改修等によって外壁や塀に使われる素材と構成もさまざまである。

1) 長屋門の配置

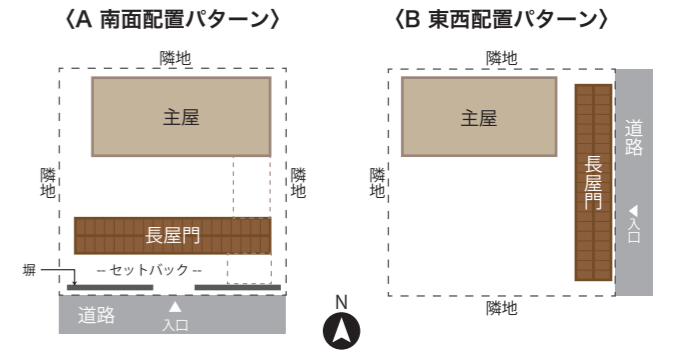
睦月島に立地する長屋門は、前面道路の向きによって大きく 2 つに分類される。すなわち、敷地南側に接する道路に向けて配置される A パターンと、敷地東西いずれかの道路に向けて配置される B パターンである。A パターンは、海岸沿いの道路に面した敷地に多く分布しており、長屋門と道路の間には風除け等のためと思われる塀が設置されている。そのため、これらのパターンの長屋門は前面道路からセットバックして配置されているのが、他島や松山市中心市街地周辺に立地する長屋門と異なる特徴といえる。B パターンは、集落内部の、海から山に向かって形成された道路に接する敷地に多く分布する傾向がある。これは、平地部ではあまり見られない、宅地領域を広く取れない島嶼部特有のパターンであるように見受けられる。

長屋門の平面形状を含めると更なる配置パターンの分類が可能と思われるが、この点に関しては今後詳細な建築調査を課題とする。パターンを整理するポイントとしては、主屋との平面プランの関係性と長屋門のセットバックにより創出されたスペースにおける下屋の有無、蔵の有無などである。多くの長屋門は増改築されており、建築のオリジナルな文化財的価値をはかることもさることながら、増改築による長屋門活用の歴史的変遷に対する理解を深めることが重要であろう。

2) 階層と屋根

長屋門の立面パターンは、階層と屋根の重なり方で分類を行うと、右図の 4 パターンの存在が確認された。確認できた限りでは、睦月島では 2 階建てで屋根が 2 層ある形式が特に多い印象がある。一方 2 階建ての長屋門は、明らかに増改築されたと考えられるものが多い。階層分類は、内覧により精度をあげる必要がある。

【長屋門と主屋の配置パターン】



【長屋門階層と屋根のパターン】

階高	屋根	
	一層	二層
1 階建 (小屋裏あり)		
2 階建		

3) 外壁や塀の作り

外壁は木板張りや漆喰が伝統的な素材と考えられる。木板張りの長屋門もいくつか残されているが、既製品のパネル等、近代的な素材で改修されたものも多くなっているのが現状である。潮風を受ける当地域において仕方がない選択かもしれないが、外壁を剥けばおそらく長屋門の伝統的な木組の構造が残っているものと推察される。

また、門前に塀を作っているのが特徴であるが、その素材や作り方(組み方)もさまざまであり、年代の特定が可能と思われる。



海岸沿いの道路に面して建てられた長屋門 (一部の列挙) (2020.9 撮影)

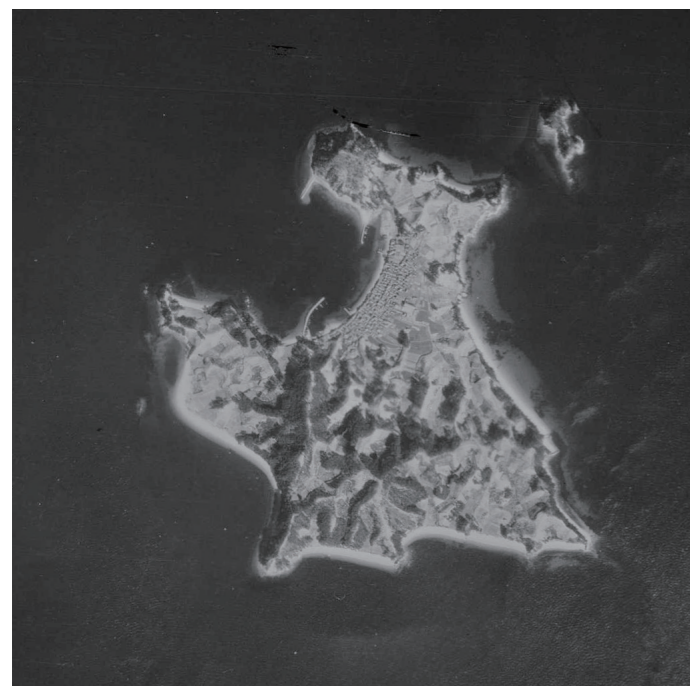
内陸側の長屋門 (2020.9 撮影)

野忽那島

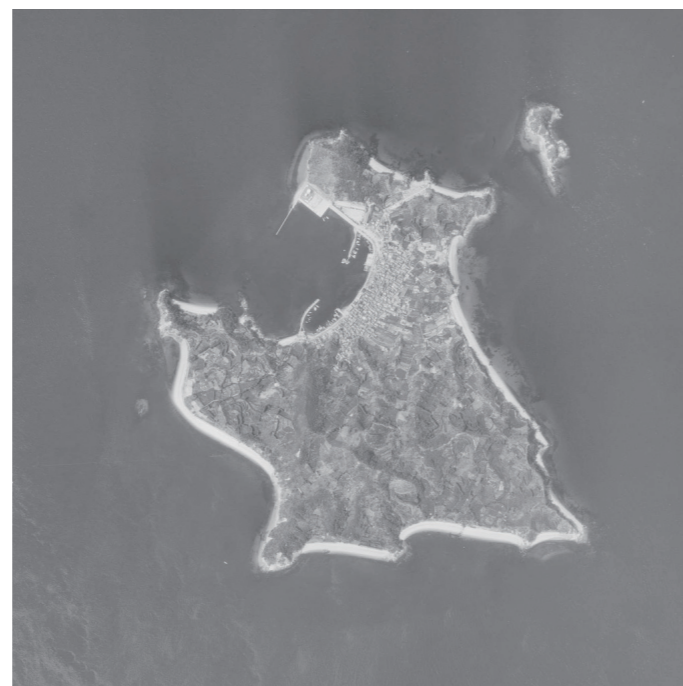


野忽那島の概要図

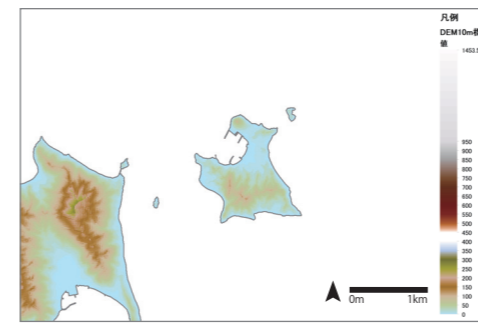
(国土地理院地図・空中写真閲覧サービス 2019年(1/12,000)を合成したものをベースに、その他情報を追記)



1948年 空中写真(1/22,000)
(出典：国土地理院地図・空中写真閲覧サービス)



1984年 空中写真(1/22,000)
(出典：国土地理院地図・空中写真閲覧サービス)



野忽那島の標高(1/100,000)
(出典：国土地理院DEM)

野忽那島の現状(2015年現在)
面積：0.92km²
外周距離：5.7km
人口：106
世帯数：71

出典：「平成27年国勢調査」、「日本の島へ行こうHP」



野忽那集落
(2020.9撮影)



オイラン山
(2020.9撮影)

(1) 空間構成

野忽那島は、陸月島から約1km 東部に位置し、野忽那島の約7km 東部には松山市の北条が、約10km 北部には安居島が位置する。面積は0.92 km²と比較的小さな島であるが、島の形状が複雑で、湾や崎が多いのが特徴である。西向きに比較的大きな湾が形成され、集落がそこに立地している。

島内には砂浜が数多く形成されており、特に島東部の全長450mほどの浜は、ヌカバ海水浴場として島外からの訪問者に開かれた浜として位置付けられている。

島には標高のそれほど高くないオイラン山と皿山がある。皿山は、遊歩道及び展望台が設置され、島の周辺を広く見渡すことができる。また戦時中の防空監視哨の一部も残されており、映画「船を降りたら彼女の島」の舞台にもなっている。



皿山
(2020.9撮影)

(2) 島の産業

1) 農業

江戸時代、野忽那島は松山藩であり、年貢として稲作が義務化されていた。その痕跡は過去の航空写真の集落の背面に水田が広がっている様子からも見ることができる。しかし、慢性的な水不足で野忽那島での稲作は困難であったとされる。

集落背後の山はそれほど高くなく、急傾斜地などの部分的な耕作不適地を除いて多くの土地は農地として活用されていたことが空中写真からわかる。

2) 漁業

野忽那は漁区に良好な礁や洲があり、1878(明治11)年の統計では全戸数である170戸が漁業を兼業していた。漁獲高も高く、行商活動も加えて多角的な生産活動を行う地域であった。昭和25年ごろには、ローラーゴチ網が九隻あったが、当時から若年労力が離村で特に不足していた集落であったため現在は皆無となり、それにかわっ

て比較的軽労働で済む一本釣りや刺し網が中心となっている。主な魚種は、めばる・たい・あじ・さわらなどである。

3) 陸月島に継ぐ行商の島

明治時代まで野忽那島は漁業が主で、昭和初期においても漁業収入が全体の60%を占めていた。また陸月島と同様に行商も盛んであったが、戦後陸月島は果樹栽培に力を入れたので、耕地の狭い野忽那島の方が、かえって行商が盛んになったという。戦時中は衣料統制で一時中断したが、昭和24年末に衣料が一部自由販売となったので再び行商が復活した。行商に使われていた船は、太平洋戦争中に徴発されたり売却されたため、戦後は野忽那に3隻残ったに過ぎなかった。終戦後の引揚者などで人口過剰になり、生活に困った野忽那島では、戦前よりも行商が活気を呈し、販路は九州・北海道・奥羽地方にまで進出していたという。



旧野忽那小学校
(2020.9撮影)



集落の漁港
(2020.9撮影)



野忽那集落の構造
(国土地理院地図空中写真 2004年(1/5,000)をベースにその他情報を追加)

(3) 野忽那島の集落

1) 野忽那集落の立地と空間構成

集落は野忽那島北西に位置し、中島に向かって開けた湾に沿って形成されている。集落の背後に大きな山はなく、裏手の湾にすぐにアクセスできるのが特徴である。公共施設(学校、港、墓地島)は集落の端、北部に立地している。野忽那島は睦月島に次ぐ行商の島として財を成したと思われるが、睦月島と比較して、住居一軒あたりの面積は小さい印象がある。現在、比較的新しく建設された住宅や別荘も見られる。



野忽那集落と皿山
(2020.9撮影)



集落墓地と裏手の海
(2020.9撮影)

2) 旧主要道路と集落道

集落内部においては、海岸沿いの道を軸として、内陸側にも湾と並行した道が形成されている。集落の外に向けては、集落から放射状に、各浜に向けた道も作られている。海岸沿いの道を南西へ進めば、島西部の農地や山林、睦月島間近に臨むことができる海岸へたどり着く。集落北部からは「たちば」へ、集落背後の西側からは、「あちまえ」、「ぬかば」、南部の山林へと通じる道が形成されている。



集落の様子(古い門)
(2020.9撮影)



集落の様子(新しめの住宅)
(2020.9撮影)

(4) 野忽那島の浜

野忽那島の特徴は、海岸の形状とそれにより多くの浜が形成されている点にある。またそれぞれの浜からは、瀬戸内海の多方面の島々を眺めることのできる多様な視点場となっている。

①『たちば』

野忽那港から、小学校跡地、宇佐八幡神社の脇を通り抜けると墓地があって、その奥に「たちば」と呼ばれる小さな浜がある。野忽那島から北の方角を見通すことができ、遠くには約10km離れた安居島、無人島の小安居島、さらに奥の広島県の島々も見る事ができる。



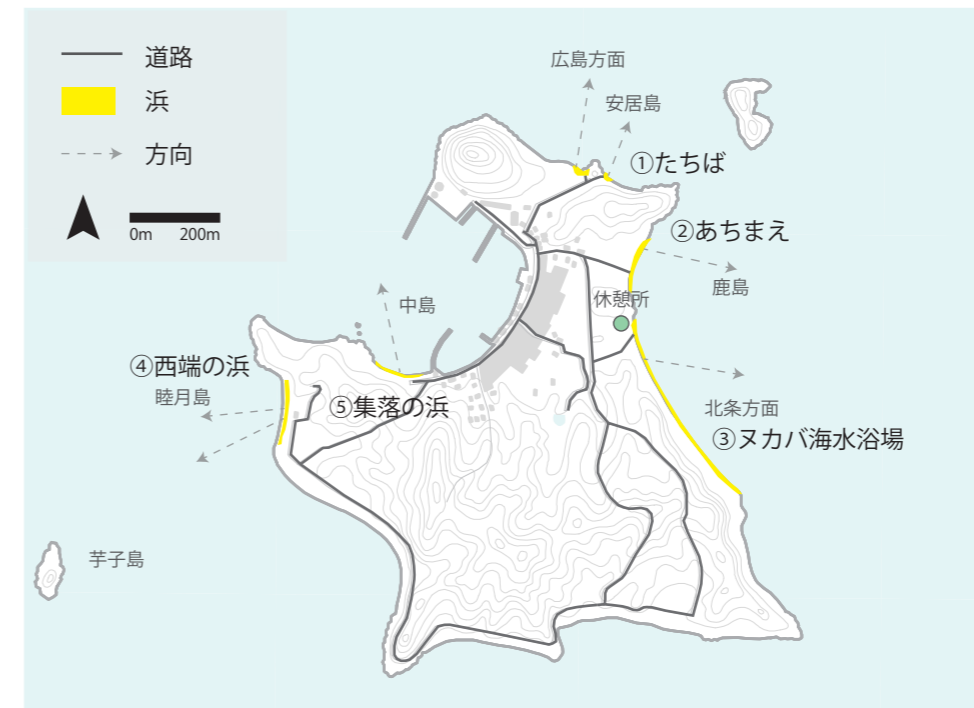
たちばからの眺め
(2020.9撮影)

②『あちまえ』

あちまえは、集落と山裾の間の道路を抜けた先の、島の北東にある集落域から最も近い海岸である。公式な海水浴場ではないが、海岸はやや広い。浜からは約7km先の鹿島や北条が見える。



あちまえからの眺め
(2020.9撮影)



野忽那島の浜(1/18,000)
(出典:国土数値情報サービス)

④西端の浜

海岸沿いの道を南西へ進むと、森林に覆われた丘を超えて、西の浜に出る。堤防越しの浜からは、睦月島や中島が間近に見え、島どうしの連続的な多島美の風景を見ることができる。

この場所のような潮の速い海峡では、栄養塩が海底から上昇し豊富な餌場となるため、隠れた釣り場となっている。そのため、海水浴ではなく、釣り人がこの辺りをよく訪れているという。



西端の浜からの眺め
(2020.9撮影)

③『ヌカバ海水浴場』

集落中心部から東に向けて進み森林を抜けるとヌカバ海水浴場へとたどりつく。海水浴場として位置付けられており、休憩所、トイレ、シャワー、キャンプ場等が整備されている。「あちまえ」と同じく、北条方面が見渡せる。近くには松山市指定史跡の「丸山古墳」がある。



ヌカバ海水浴場
(2020.9撮影)



ヌカバからの眺め
(2020.9撮影)



ヌカバの休憩所
(2020.9撮影)

⑤集落の浜

集落南西の端に形成された浜は、北に向かってひらけ、中島が見渡せる。またここから見える「重ね岩」は、野忽那島の海のシンボルである。



集落近くの浜からの眺め
(2020.9撮影)